

劇的出来事の展開と「死」

高野 洋 志

岡山理科大学教養部

(1991年9月30日 受理)

はじめに

ある出来事に「劇的」という形容詞がつけられるのは、その出来事が日常生活の一般通念や秩序を揺るがすような内容を持ち、速く多くの人々に知らせとして伝わり、当事者だけでなく、知らされた人々の強い反応を引き起こすためである。アリストテレスは悲劇の素因として物語（ミュートス）を最重視しているが、これを構成する「逆転」、「認知」及び「苦難」という要素を、現代の「劇的」とされる出来事の内容にも見いだすことができる。ただし、この形容詞は現在、必ずしも「悲劇的」という意味だけでなく、多くの人々に歓迎される結果をもたらす出来事にも用いられている。また、劇場での劇が、すぐれた演出や演技で観客を感動させるのに対し、劇的出来事は、一般に、日常生活の様々な局面で繰り返されている演技が不可能になるような事態や、前例のない事態の発生により、周囲の人々の関心をひくのである。とりわけ、死者を出す事態は、その出来事の重大さ、激しさや緊急性を意味すると考えられ、大きく報道されると同時に、強い反響を呼び起こす。たとえば、日本史年表の1982年の項をみると、「2・8東京のホテル・ニュージャパン火災、32名死亡△2・9日本航空機羽田沖に墮落、24人死亡……△7・23長崎地方に集中豪雨、死者行方不明299人」¹⁾、世界史年表の同年の項には「1月13日 米旅客機、ワシントンで墮落、78人死亡……9月16日 西ペイルートのパレスチナ難民キャンプで虐殺事件（1500人死亡）」²⁾とある。この年にはまた、バングラデシュでクー・デタが起き、フォークランド紛争がイギリスの勝利に終わっている。これらの出来事は、大きいのが、それぞれこととなる反響を呼んだ。それに対し、毎日のように繰り返し起こる出来事は、たとえ多くの死者を出しても、悲惨さに対する感情が鈍化していき、その報道が、日常性のなかにとりこまれていく。例えばドロ沼化した戦争の戦況や、日本で年間1万人以上の死者を出している交通事故がそうであるが、ニュースとして第三者の関心を呼びにくくなり、マスコミの取り扱いが型にはまってしまう。John McMannersは18世紀のフランスについてこう述べている：「生活は、常に危険にさらされており、辺境にいる凶暴な男たちや、獐猛な動物による危険の恐ろしい影がつきまとっていた」³⁾。「職場の劣悪さは、たとえば、ザクセンの炭鉱では1人の女が12人もの夫に先立たれることもあるくらいだった」⁴⁾。「劣悪な労働および生活条件の死亡率への影響の憂慮すべき例として、軍隊を取り上げることができる。

戦時において、砲撃で命を落とす水兵は少数しかいなかった。72門の砲を装備した戦艦アジャクスは、1780年2月から1784年6月まで大西洋およびインド洋、巡航したが、その間、430名の乗組員のうち、228名が死んだ。戦死者はわずか30名であって9名が溺死したのに対し、戦病死は185名にも上った⁵⁾。医療が発達しておらず、治安状態がわるく、防災対策が十分に施されていない社会では、人々は死と隣合わせに暮らしている。こうした社会では、死者が出ること自体は、出来事を「劇的」にする条件ではない。

沖縄の竹富島では、島外で死んだ者、事故死した者と幼弱死した者については、それ以外の死者とはことなる葬礼により別の場所に葬られるが、死者がだれで、いつ、どこで、どのように死んだかにより、人々の、死者と死の事実に対する扱いや態度がことなるのは、沖縄に限らず、世界中どこでも同じである。それならば「劇的」とよばれる出来事における死者とはどのような扱いを受け、死の報道がどのように反響を呼ぶのであろうか？ここでは劇的出来事をその内容によっていくつかに分類し、それぞれのケースにおいて、死が出来事の展開にいななる影響を及ぼすのか、また死者はどのような扱いを受けるのかを検討する。

1. 犠 牲

現代の地球上では、人間供犠はもう行われていない。しかし、マスコミの報道では、「犠牲」、「犠牲者」という言葉が頻繁に使用されている。多くの場合、この言葉が用いられるのは、災害、事故、それに戦争における非戦闘員の死者についてである。いったい、「犠牲」という言葉の現代的用法と本来の意味とは、何等かの共通の観念で結ばれているのであろうか？それとも、「加害者」、「過失」、「被害者」といった規定を避けるためや「不運な死」の無意味さを隠すために用いられるのであろうか？

Fraserの金枝篇には、数多くの人間供犠の例があげられている。トウモロコシ、豆や南瓜が豊作となるように、男女いずれかの捕虜をあらかじめ太らせておき、群衆の面前に引き出して十字架に縛りつけ、頭を鉞でたたき割り、矢を浴びせかけ殺す北米パウニー族の例⁶⁾、3ヵ月に1回、男女1名ずつを鋤と鍬でもって殺し、耕したばかりの畑の真中に埋める西アフリカのある王国の例⁷⁾、若い娘と羊、山羊何頭かを殺すギニアのラゴスの例⁸⁾、12~3歳の美しい奴隷の少女を、トウモロコシの女神としてふるまうように仕込み、9月の大祭中、穀物や種子を積み重ねてある上で首をはね、鮮血を農作物や種子の上にふりかけ、祭司のひとりが少女の皮を剥いで身にまとい、行列の先頭にたって踊るメキシコのアズテク族の例⁹⁾等は、Fraserに従うなら、豊作を祈願して神に人間の命を捧げるのではなく、特別に選ばれた人間を穀物霊の化身とみなして殺し、種子に宿るよう畑の中に埋める呪術的行為なのである。「村や町や国の積み重なった災厄を公的に追放する」¹⁰⁾のために、罪をおわされた神として、動物や人間を殺す例もあげられている。呪術的世界観において、人間は、霊(神)に対して、脅迫と威嚇を行う。またときには「神」を殺しさえするのである。こ

のような意味を持って、犠牲の人間や動物を殺す儀式は、明らかに、祭りのクライマックスをなす。それまで神としての待遇を受け、様々なタブーに包まれていたがゆえに、周囲に一種の緊張状態を作り出していた犠牲の人間が殺される瞬間は、祭司の側に立って儀式を見物していた人々にカタルシスを与え、緊張を解除する。暴力の行使を劇的に演出するこのような儀式こそ、共同体をその深層心理のレベルで再融合する手段であった。René Girard は、人間や動物の供犠行為が宗教的慣習の最も特徴的形態であるとする一方で、Fraser が彼のまわりの、社会心理的な、文明化された、贖罪の羊を探す傾向に気付いていないかあえて無視していると指摘するが¹¹⁾、政治と宗教が不可分な共同体で行われたこのような儀式が、必ずしも宗教的慣習にだけでなく他の領域にも姿を変えて残っているのはむしろ当然かもしれない。

登場人物の不条理な苦難を描く悲劇が、ディオニュソスの大祭に演じられるようになった事実は、人間供犠の儀式と密接なつながりがある。ディオニュソス自体が八つ裂きにされた神であり、「プロメテウスやエディプスなども、みなあの本来の主人公ある、ディオニュソスの仮面にすぎなかった」¹²⁾からである。悲劇の観客は、人間供犠の儀式のかわりに、人間の根底的罪をかわりに背負ってくれる主人公の苦難をみてカタルシスを得た。しかし、舞台の上では、殺害の場面を決して演じなかったギリシャ悲劇は、バロック悲劇ほどには、実際の人間供犠に近くなかった。後者の舞台上では、小道具として、内臓や血まみれの手足さえも作られもちだされた。『残酷なモール人』の復讐・・・では観客は、為す術も無い、みじめな、鼻を切り落とした貴族といっしょに、これら相次ぐ死のドラマといやまず興奮を見まもる。観客は、復讐をたえ忍ぶ。これとは反対に、『マホメット教悲劇』においては、観客はヒロインとともに復讐に参加し、ヒロインとともに血に酔い、殺人を、そして同じ死人を何度も殺して殺戮を永びかせることを野蛮にも無上の楽しみとする¹³⁾といった奮闘気が劇場を支配した。

呪術的世界観のもとでは、災厄を予防する、あるいはそれを追放する目的で、動物や人間に罪を背負わせて殺す。我々の社会では災害や事故の直接の被害者こそ、何の罪も無いのに防災措置の不十分さの犠牲になったわけであるから、その霊を手厚く供養する一方で、原因を調べ、二度と同じことが起きぬように対策をたてる。しかしその違いにもかかわらず、どこかに共通要素を見いだすとすれば、かつての人間供犠の儀式で人間が殺されるのを見物した人々のように、マスコミの手段が発達したおかげで、我々は、災害や事故の様子を、時間を置かずに知ることができるし、場合によっては現場での死に、テレビを通して「立ち会う」ことさえでき、運が悪ければ自分がその立場に置かれたかもしれない人々にカタルシスを与えるという点だろう。René Girard が指摘する、文明化された、贖罪の羊を探して殺す傾向は、大衆が災厄の元凶として特定の個人や少数派の集団に罪をおしつけ、抹殺する行動をとれるような場合に表面化する¹⁴⁾。そのようにして攻撃された者は、もはや「犠牲者」とはよばれないけれども、こちらの行為もまた、多数派である人々の不安

を解消し結束をつよめる効果がある。

2. 質 と 量

災害や事故では、重大な被害と多くの死亡者が出たことが判明するまで、出来事は誰にとっても受動的にしか対応できないかたちで進行する。もし能動的に対応できていれば、被害は生じないか、わずかですむのであるから、これは当然である。その後、困難な状況の中で、救出、救援、復旧活動がおこなわれる。絶望的と思われた人命が奇跡的に救われたりすると、これも劇的出来事となりうる。救出の成功は、事態のコントロールが可能になり、秩序が回復しつつあって、周囲の社会の協力関係が強められている決定的証拠となるからだ。反対に、救援・復旧活動がはっきりと有効性を示すことなく、秩序の回復が遅れ被害者の苦難が継続したりするならば、こうした連帯感は生じないし、被害者および彼らの側に立つ者と行政組織や支援に消極的であった者との溝は深まっていく。

1988年6月に始まったバングラデシュの洪水の場合、9月には50県に及び、200人以上の死者を出し、住居、衛生、食糧事情などが極めて悪化した。それまで活発であった反政府運動は休戦状態となり、政府は国際援助を獲得すべく外交活動を展開する。フランスからミッテラン大頭領夫人、米国からジェイ・モリス US AID 副長官、国連からモハメッド・エサフィ事務局次長らがバングラデシュを訪れて状況を視察し、それぞれ国際的援助に取り組むことになった¹⁵⁾。同年12月に発生したアルメニアの大地震の場合には、数万人の死者が出て、倒壊した建物の下敷きとなった人々の救出の困難さと多くの国が緊急救援活動に参加したことが大きく報道された。どちらのケースにおいても、日本は、他の先進諸国に劣らない額の緊急援助を行っているが、災害発生直後の救援活動の迅速さとその質の点で、援助額の大きさに比例した評価はうけていないようである。

経済的に防災対策が十分にたてられない国、森林の伐採や無計画な開発により環境破壊が著しい地域、人口の大量流入に公共投資や雇用が全く追いついていない大都市、危険物を製造する工場や公害を発生させる工場を外国資本の導入で建設しながら、危険に対する認識と安全管理が不十分なままの地域などは発展途上国に多く、災害の規模を著しく拡大する原因となっている。またこれらの国々は、一般に政治的経済的に不安定であり、内外の戦争や食糧難などにより、数十万から数百万単位の難民を出しているし、これからも出す可能性がある。災害により大量の死者を出す背景には、したがって、南北問題が横たわっている。国の歴史においても、苦難のなかにある諸個人にとっても、「劇的出来事」を体験しつつあるときに、富と平和を享受しつつある日本のような国から、平時の防災対策への協力を含めて効果的援助が差しのべられないとすれば、国際世論はいつまでも日本に対し好転することがないであろう。救援活動自体が「劇的」となりうるのであるから、国力に応じた有効な緊急活動が、民間人を主体として — というのはそれが国際政治のイニシアチヴをとる手段に使われるべきでないから — 真剣に研究されてしかるべきである。

3. 抗争における「死」

多数の死傷者がでる災害や事故が、一時的であるにせよ、救援活動へ周囲の社会を結束させるのに対して、民族集団や宗派 — これらは重り合うことがあるが — のあいだの対立で死者が出る場合は、事態の展開は全く別のかたちをとる。つまり死者がでたことで対立が決定的となり、報復攻撃がエスカレートしていく。別の場で「聖バルテルミーの大虐殺」や「サラエボの銃声」の例をとりあげたが¹⁶⁾、最初の死者は、双方の、緊張し不安な状態にある集団心理を、攻撃行動に転嫁する口実を与える。「戦争の扇動にあたって死者の果たす役割の重要性は計りしれないほど大きい」¹⁷⁾。衝突は次第に拡大し、最終的には、双方のうちどちらかが他方を力のうえで圧倒するか、抗争地域から相手を追い出してしまうか、抗争がドロ沼化し、厭戦気分が強まるかによってしかおわることはない。和解が容易でない理由は、抗争を続ける限り、集団内には、敵に対して結束するという凝集力が働き、仲間の死を契機に強まる「同志」意識が、「敵」に対する憎悪を再生産し、攻撃行動を先鋭化させるからである。「敵」は殺してもよいし、殺さねばならない、ただし「味方」のために命をも捧げねばならない¹⁸⁾という原則に依拠する点では、暴力を用いて抗争するすべての集団は、国民に兵役を課すことのできる国家の、原型にほかならない。西欧では、独立戦争、征服戦争、革命や宗教戦争といった、様々な、ときには多くの死者を出す劇的出来事、または一連の劇的出来事から、新しい制度が生まれ、民族性を確立あるいは克服し、信仰の自由を保証し、「国民」の概念を領土内に居住する大多数の人間にまで広げる「国民国家」群が生まれた。しかし、民族問題がいまだに完全には克服されていないことは、いまでも、スペインでのバスクやカタロニア、イギリスの北アイルランド、フランスのブルターニュやコルシカ、それにベルギーの言語問題をみればわかる。

国家間の戦争はもちろん、あらゆる抗争の死者は、死者を出した側の集団にとって、罪のない「犠牲者」か、命をかえりみず戦った「英雄」となる。国家は戦死者の慰霊碑を建設し、遺族年金を支払う。こうして、戦場での無残な死は、集団や国家に忠誠を誓った人間の「英雄的戦死」に美化され、次の世代に対し、「英雄」達を見習って、国家のために命を捧げるよう教育する。「ラ・マルセイエーズ」の「子供達の節」では次のように歌われている：

| | |
|------------------------------------|-------------------|
| Nous entrons dans la carrière | 我々は入隊するだろう |
| Quand nos aînés m'y seront plus ; | 先輩たちが死んだら； |
| Nous y trouverons leur poussière | そこでかれらの遺骸と |
| Et la trace de leurs vertus. (bis) | 勇気ある行いの名残をみつけるだろう |
| Bien moins jaloux de leur survivre | 彼らの死んだあとと生き残るより |
| Que de partager leur cercueil, | 同じ棺に入ることを願って、 |
| Nous aurons le sublime orgueil | 彼らの復讐を遂げるか後を追うことに |
| De les venger ou de les suivre! | 崇高な誇りをもつだろう。 |

| | |
|------------------------|-------------|
| Aux armes, citoyens, | 武器を取れ、市民達、 |
| Formez vos bataillons! | 隊列を組め! |
| Marchons! Marchons! | 行軍! 行軍! |
| Qu'un sang impur | 敵の汚れた血が |
| Abreuve nos sillons! | 我らの畑を潤すように! |

軍の高い士気を保ち、新兵の徴募を容易にするのは、戦闘での勝利であり、勝利に導いた指揮官と国家に対する信頼である。さらに、ひとつの戦争に勝利した国はますます強大になり、功績のあった司令官が、戦後、権力の座につくことも多い。反対に、敗北した場合は、急速に軍の士気は落ち、軍指導部と政府に対する不信が増大して、反乱や政府が倒れる事態にいたることもある。

死者の出る紛争は、人間社会では普遍的に見られる現象である。その発生原因は様々であり、場所も時間も限定されないけれども、社会現象としての他の様々な活動と行為同様、考察の対象とされてきた。とりわけ第2次世界大戦後の西欧諸国で、「戦争学(Polémologie)」の名称で社会学の重要な1領域となっている。戦争での人命破壊を考える上で、それまでの平和主義や戦争の技術論とは全く別の視点を与えたのは、Malthusの、戦争が人口を抑制する要因のひとつである、とする考え方である。「戦争学」の創始者のひとりである Gaston Bouthoulによれば、人口の増加が直接、戦争の原因となるわけではないが、様々な、人口の増加傾向に対する「破壊的的制度」を設ける刺激となる。これらの制度は、(1)同性の諸個人を集め強制的に隔離する：僧院、尼僧院、ある種の教育施設、牢獄および兵営（特に戦時の）、(2)労働の可能性を奪う：失業は上記の施設に入る人間を増加させ、貧困による死亡率を増加させ、平和的あるいは戦闘的移民をうながす（すべての攻撃的戦争は武装移民と同義である）、(3)刑罰の強化や迫害により社会生活の可能性を決定的に奪い、死亡率を増加させる、(4)大量かつ即効的に人命破壊をする：子供殺しや、極悪の生活条件あるいは戦争への動員による若者殺し¹⁹⁾。

集団の指導者は公然と「口減らし」を政策にすることはない。しかし、人口の爆発的増加が経済成長をうわまわる国では貧困化が進行する。貧困社会における教育や避妊手段の普及による人口増加の抑制が大変難しいことは経験的に知られている。「破壊的的制度」が意図的に設けられなくとも、結果的にはなんらかのかたちで、過剰人口が「処分」される。雇用の増加は不可能でも、石油資源輸出などで外資収入が大きければ、強力な軍備を整えられ、多くの兵士を養える。そして、国境紛争を起し、隣国への軍事介入を行う。少数派の民族、宗教や社治集団に圧迫を加えて、生活手段を奪ったり国外に追い出したりする。中央政府の力が弱い国では、諸集団が生活手段や生活空間を奪い合って内戦となる。また大量の難民のかたちで人口の流出が起こる。そして食糧や医薬品の不足する難民キャンプでの死者は子供が圧倒的に多い。

災害による死者と同様、戦争による死者も発展途上国特有の背景をもっている。競って

世界に植民地を拡大することのできた西欧諸国の近代史を踏襲することは禁じられているが、今の発展途上国には、「東西」の緊張が消滅した後の世界で、旧西側先進諸国からの「援助」に競って頼る以外の、新しい近代化のモデルは提示されていない。好戦的姿勢の背景に過剰な人口の圧力が存在し、国家をもたない民族は、それを支配する民族に圧迫され続ける現状では、地域紛争の激化は不可避であり、しかもその破壊的影響は、使用される兵器の高性能化とともに、飛躍的に増大しつつある。「北」が「南」を経済的、軍事的に封じ込めることによってしか得られない「均衡」は長続きしない。

4. 自殺

三島由紀夫と循の会のメンバーの自殺事件は、海外にも大きく報道され、“harakiri”の伝統や“kamikaze”の思想の延長上にある行動とみられ、それがノーベル賞候補にもなった、世界に知られている作家によって行われたことで大きな反響を呼んだ。1978年1月18日、南米ギアナで、927人の新興宗教の信徒が教祖の教えに従って、青酸化合物を服用し、集団自殺した事件は、死者の数の多さと、特異な現場の状況が、大きな話題となった。しかし、このように大きく報道される自殺の例はまれであって、統計の上では、自殺という行為自体、決して珍しいものではない。我が国では戦後、毎年、人口10万人あたり19人前後の自殺者をだしており、そのうち女性の自殺は男性のその60%程度である。

それ自体は衝撃的行為であっても、自殺が、その社会の特徴と状態を示す、安定した現象であることを明らかにしたのは、E. Durkheim である。彼の自殺論のなかで、とりわけ重要とされるのは、恐慌の際に自殺者が増えることに注目した点であり、これが、社会的混乱で、「たとえそれが苦難に満ちた危険から生じた混乱であろうと、幸運な、しかし急激な変化をともなう危険から生じた混乱であろうと、しばし社会はこの活動（個人にたいする規制）を行使することができなくなる。そして、・・自殺曲線の急上昇は、じつにここから起こってくる」²⁰⁾と説明する。

1930年を最後に、19世紀に幾度も繰り返された典型的恐慌は起こっていないが、ひとたび恐慌が起これば、企業倒産や失業が急増し、経済生活が崩壊するだけでなく、社会全般にわたって価値体系が崩壊し混乱が生じる。恐慌はそれゆえに、経済活動が原因で生じる劇的出来事である。19世紀の恐慌は労働運動の普及をうながし、1930年の恐慌はドイツにおけるナチス党の勢力の飛躍的拡大や日本での軍部の台頭をもたらしたが、一方で、自殺率の顕著な増加という現象をももたらした²¹⁾。「アノミー」の概念は主にこうした経済恐慌や不況に伴う社会的混乱の分析に用いられているが、経済上の原因でなくとも、やはりおおきな社会的混乱を招いたいくつかの劇的出来事を体験した国に、自殺者の急増現象がみられる。1956年のハンガリア動乱の例では、民主化運動の挫折とともに多くの自殺者をだし、1968年のフランスの「5月革命」では、パリ市の自殺率が前年の倍になり、同年のチェコスロバキアの「ブラハの春」では、前年の5倍に達したといわれている²²⁾。運動が拡大

し、それまで支配していた日常的な秩序が崩壊すると、すべて可能にみえる。しかし、混乱は思いがけないかたちで収束にむかい、秩序が以前よりさらに厳しく回復さる。そのとき無限に拡大していた期待や欲望は、もはや外部から強制される現実に耐えられなくなる。対立する勢力間のエスカレートする衝突がもたらす死には、集団が前面に出て意味を付与し結束のシンボルとするのに対し、集団の勝利に託した救済の希望が打ち砕かれて自殺するものには、誰も何の意味も与えない。「幻と光を突然奪われた宇宙のなかで、人間は自分を異邦人と感じる。この追放は、失った祖国の思い出や約束の地へ希望を奪われている以上、そこではすぎるべき綱はいっさいたたれている。人間とその生との、俳優とその舞台とのこの断絶を感じる、これがまさに、不条理の感覚である。」²³⁾とカミュの定義した精神状態に、自ら終止符を打つ、救済のない、運命的な「死」にこそ、劇的出来事の本来の意味（悲劇）がよみがえる。その精神状態に耐え、生き続ける者は、回復された秩序に帰依するか、あくまで抵抗を続けるか選択しなければならない。そして、もし、死者の記憶が残り続けるなら、いつか歴史はまたべつの機会に、「幻と光」をあたえてくれるかもしれない。

おわりに

災害や事故により死者が出たという事実は、原因を究明して防災対策をとるうえで大きな動力を与える。我々の社会は、まだ、確率のあまり高くない災害や事故の可能性を前提に、日頃から、用心深く防災に大きな労力を注ぐほどには「進化」していない。人々を納得させ、防災に協力させることができるのは、というより、行政の側に十分な支出をさせるのは、「犠牲者」がでたおかげであり、放置すれば、新たな死者を確実にだすという事実が突きつけられるからである。しかし、外国で生じた災害についてはどうだろうか？

地震は別として、今日の地球上では、環境破壊が直接の原因となった災害が多くなりつつある。そして人口の爆発的増大が、人的被害を大きくしている。原因と結果は国境を越えて絡み合っており、あえて責任を否定することは、やがて自分の首を締める結果を産む。

太平洋戦争後、日本は直接的戦争や、多数の死者を出す内戦、内乱を経験していない。これだけ長期にわたる平和を享受している国は世界でも数少ない。フロイトは「わりに小さな文化圏の利点、すなわち、その文化圏が自分のそとに立つ人たちを敵とすることに衝動の逃げ道を見つけるという利点は過小評価してはならない。かなり多数の人間を、愛においてたがいに結びつけることは、他の人たちが攻撃のはけ口になるように残っているばあいだけに、つねに可能なのである。」²⁴⁾と書いている。戦争の痛手がいまだにはっきりと記憶に残っている日本の場合はともかく、アメリカ合衆国などを例にとれば、第2次大戦後、朝鮮戦争、長期にわたったベトナム戦争、そして1991年の対イラク戦争と、大規模な戦争をいくども遂行している。世界でもっとも文明の進んだ国のひとつであるアメリカ合衆国は、その意味で対外的に極めて好戦的であり、「死」についての国民感覚の違いは、銃器の取り

扱いや治安状態をみてもあきらかである。もし、逆説的な「抑止」に頼らず、教育その他の努力によって、フロイトのいう「攻撃衝動」をコントロールできるものなら、それは日本で成功するかもしれない。しかし、その前に「経済活動に転化された攻撃性」が問題になるであろう。また、別の道をたどろうとするなら、素材はいくつもある：北方領土はなかなか返還されない、領海と漁業の安全が脅かされている、外国人労働者の急増。優れた兵器を製造できる技術はあるし、その市場も大きい。あとは戦争での自国民の死、「敵」の死を必要悪とする感覚を養うだけである。

ある程度、死者がでることは、軍事力を背景に権力を握ろうとする者には必要である。みせしめの効果をあげるためには、短時間で圧倒的な力で、先頭にたつて反対する者たち（同国民）を殺さねばならない。1973年9月のチリのクー・デタ、最近では、1988年10月のミャンマーのクー・デタ、それに「天安門事件」がその例といえる。効果のみせしめの死は、当面の抵抗を封じるが、いつまでも国民の記憶に残って火種となる。その火種が再び燃え上がるときに、同じような「蛮行」を繰り返さないという歴史的理性が働くなら、その国は、着実に、国民の政治意識上の近代化を一步進めたことになる。

劇的出来事における「死」は、人々の注意を引く一種の記号である。それは日常生活の細分化された領域固有の価値体系とそれに従ったシナリオから諸個人を、少なくとも意識の上では、引きずり出し、集団ないしは社会全体の価値観のレベルで反応するように働きかける。したがってこの記号は、日常生活の価値体系を相対的に押し下げて、進行中の出来事に向心的にコミュニケーションの回路をつなぎ、伝達速度と反応を速めるように作用する。社会空間は一時的に圧縮される。劇的出来事における「死」に対する反応がにぶった社会は、細分化された離心的コミュニケーション回路しか持たず、世論形勢やコンセンサスに達することが困難であろう。逆にその反応が過敏な社会では、ファナティズムに支配され、場合によっては、「死」の拡大生産が起こるかもしれない。このような、記号としての「死」がはたす役割について、それぞれの社会の特徴と変化を、常に注意深く見守る必要がある。

注

- 1) 日本歴史大辞典編集委員会編、「日本史年表」, 河出書房新社, 1991, P. 385。
- 2) 日比野丈夫編、「世界史年表」, 河出書房新社, 1991, P. 605~608。
- 3) マクナマーズ, ジョン, 「死と啓蒙 — 18世紀フランスにおける死生観の変遷」, 小西嘉幸, 中原章雄, 鈴木田研三訳, 平凡社, 1989 P. 24。
- 4) *ibid.* P.25.
- 5) *ibid.* P. 25.
- 6) フレイザー, ジェームス・G, 「金枝篇」, 永橋卓介訳, 岩波文庫, 第47章 リテュエルセス, (III, P. 212)。
- 7) *ibid.* 第47章, (III, P. 213~214)。
- 8) *ibid.* 第47章, (III, P. 214)。
- 9) *ibid.* 第59章 メキシコの神殺し, (IV, P. 210~211)。

- 10) *ibid.* 第57章 公的替罪羊, (IV, P. 181)。
- 11) Girard, René, *Generative Scapegoating*, in "Violent Origins", Stanford University Press, P.76.
- 12) ニーチェ, 「悲劇の誕生」, 秋山英夫訳, 岩波文庫, P. 100。
- 13) ルース, ジャン, 「フランスバロック期の文学」, 伊東廣太他訳, 筑摩書房, 1985。
- 14) Girard, René, "Violent Origins", P. 120.
- 15) 「アジア動向年報」, 1989版, アジア経済研究所, P. 529~531.
- 16) 高野洋志, 「出来事の『劇的』効果について」, 岡山理科大学紀要 第25号B。
- 17) Boutoul, Gaston, "Traité de Polémologie", Payot, Paris, 1970, P. 328.
- 18) *ibid.* P. 314.
- 19) カネッティ, E., 「群衆と権力」上, 岩田行一訳, 法政大学出版会, 1981, P. 198.
- 20) デュルケーム, 「自殺論」(世界の名著—デュルケーム, ジンメル) 宮島喬訳, 中央公論社, P. 120。
- 21) Mosestier, Martin, "Le Suicide" *Historia Spécial*, No 388 bis, 1979, P. 59~64.
- 22) *ibid.* P. 55.
- 23) カミュ, 「シーシュポスの神話」, 清水徹訳, 新潮文庫, P. 14.
- 24) フロイト, 「文化論」, 吉田正己訳, 日本教文社, 1970, Pz 82。

Les Morts dans Les Evénements Dramatiques

Hiroshi TAKANO

Faculté des Etudes Générales

Université pour les Sciences Naturelles d'Okayama

1-1, Ridaichō, Okayama-shi, 700 Japon

(Recu le 30 septembre 1991)

Nous avons peut-être pris une mauvaise habitude de mesurer la gravité d'un événement avec le nombre des morts qui en résultent. Car nous recevons tous les jours les nouvelles des morts du monde entier : les désastres, les accidents de grande envergure, les affrontements violents, les coups d'Etat suivis de répression sévère etc. Cependant ces morts portent leurs propres noms suivant la façon dont ils ont perdu leur vie et suivant la circonstance : victimes, héros, martyrs, suicidés etc. Les morts donnent des impacts inégaux, avec leur aspect non seulement quantitatif mais aussi qualitatif, aux drames qui deviennent parfois historiques. Nous analysons ici, la diversité de ces impacts et des sens attachés aux morts dans les événements dits "dramatiques".